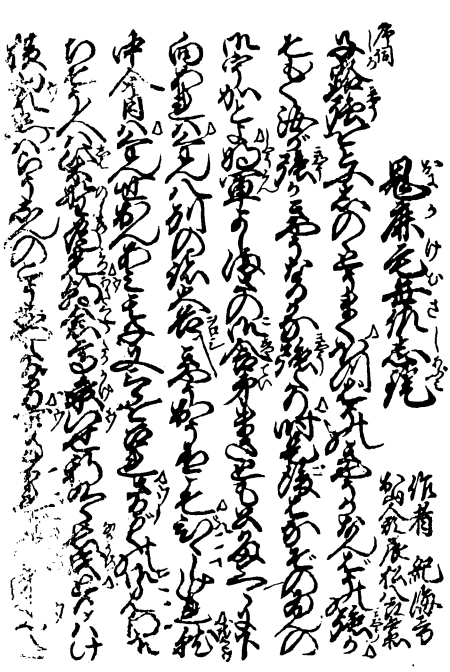
鬼鹿毛無佐志鐙

作者　紀海音
お山人形　辰松八郎兵衛

序詞子路強を問ふ子の曰く。北方の強か南方の強か。そも〳〵汝が強か強たる哉強たり。時維後花園院の御宇かとよ。將軍義政の御舍弟政知公鎌倉に下向あれば。關八州の諸大名　オロシ〳〵翹應あるこそ。美々しけれ。地就中今日は觀世音阿彌その子又三郎を召され。猿樂の御見物御馳走人は斯波の爲光。朝倉高景伊勢新九郎長氏。とり分け横山左衛門は老臣の功者たる間。萬事彼が指圖に從ふべしと。上の仰を鼻にかけ生得利慾にして。へつらへるを悦び直なるを嫌ひ。斯波の爲光を最辰し小栗は婿ながら憎み。度々の惡言を聞かぬ顔して居給ひしが。御能も最早四番過ぎ中入の間に人々は　フシ廣間に。出でて休息ある。地高景小栗に打向ひ。詞誠に多謝程羨しいものはござらぬ。貴殿の高砂の小唄殊の外殿の御機嫌にて。我々ども迄大慶に候とあれば。横



山打笑ひ。朝倉殿とも覺えぬ御挨拶。一色に勝れるを茶臼藝と云ひ。取りまぜて習ふを石臼藝と申して嫌ふ事にて候。昨日斯波殿の的射の御上覽こそ。侍の一藝なれまさかの時に皷にて人は切られまい。其の上自身が何程自慢にても。太夫が目からはさぞをかしからう。地正眞の面の皮の厚いとはかやうの事を申すぞと。苦苦しく云ひければ。傍に在合ふ面々は小栗は短氣な人なれば。もしや凶事の出で來んとッ固唾を呑んで居たりけり。地小栗は何とか思はれけんずつと立つて白洲に下り。中間與四郎と召さるれば早御立かと御刀を。かたげて傍にうづくまる。詞小栗近く寄つて。汝主を大切に。思ふ所存を見屆けて侍に引上げ度う思ひしが。不具なる故今迄は延ばした。其の刀を其の方に取らする間。今よりは侍ぢやと思うて。主のために忠を勵めと宜へば。地はつとばかりに與四郎の涙は髭にたまりけり。詞ヲ、嬉しいか嬉しい筈。扨某はかく〳〵の事ありて横山を討果す覺悟ぢや。汝はいぬゐへ歸りて。照手の姫に暇を遣はすと傳へよとあれば。地與四郎はぎよつとしてせけばせく程否應の。詞も出でず腕まくり。主の御供をする顏にきつばを廻し見せければ。小栗御覽じヤレ狼狽者。詞相手向ひの口論に助太刀が要るものか。汝を侍にしたは弟の大六に奉公せよといふ事よ。立歸つて大岸宮内と心を合はせ。弟を守立てくれよ。地それこそ死に勝る忠節よと詞を盡しのたまへば。とてもお供は叶はぬよとうらめし顏に與四郎は泣く〳〵へ館へ急ぎける。地小栗座敷に立歸りさあらぬ體にもてなし。横山殿そと御意得たき仔細あり暫く是へとのたまへば地何事やらんと左衞門次の間につつと出で用事如何と尋ねける。詞小栗傍近く立寄り。イヤ餘の儀にあらず。尤も婿男の挨拶心安き餘りとは存じながら。度々の悪口殊に只今の一言。歴々の中にて面目を失ひたる無念。骨髄に徹りて堪忍ならず。お覺悟あれと云ふより早く小刀を拔放し。疊みかけて切り給ふされども烏帽子に障へられて。切先はづれに背中に當れば。あつと云うて倒れしを今一太刀と進む所を。斯波の爲光後より。抱き留むれば諸大名。我も〳〵と立掛りまづ雙方へ分けにけるッ無念といふも限なし。地此の由上へ訴へれば。武士の遺恨はさる事なれども所といひ折といひ。かたゝもつて狼藉なり小栗に腹を切らせよと。もつての外の御機嫌にて朝倉は太刀取り。新九郎は檢使の役前後左右に取圍み。いぬゐの館へ連れて行く。屠所の羊の三度心なり。ヘルッシ鐘さえ閨に。色つけて。地い

ぬゐの窓に月ぞいる。照手の姫の玉の照る。スエテ鴛鴦の池の水。フシ絶えず滑たり松風の。連理の枝をならさぬとや。地然るに姫君この程は枕も重く氣も重く。朝夕好きの玉琴もつい投げやりて驕息に。凭れかゝつてつく〳〵と フシ物思はしき氣色なり。詞局いふやう。この程は何を遊ばしても御氣むづかしさうな。閏年には槌の子も。地青梅好くと聞きましたが。もし左樣のお覺はござりませぬかといへば。詞おはしたの梢進み出で。今朝針立の道閑樣の仰しやるは。御姫樣のお煩はお泉水の水の減りぢや。殿樣のおつき山好きなさるゝからぢやと云はしやんしたと。地お氣慰みの惡口も フシ女奉公は氣樂なり。地姫君聞召し氣合の惡い事もなう。たゞ浮かゞ〳〵と起きもせず寢もせで夜を明かしては。春のものとや戀ならん。唯世の中が味氣なう思はぬ涙が零るるなり。詞殊に過ぎし夜見し夢に君の寵愛なされける。重藤の御弓を天より鷲が鐸下り。三つに蹴折りて末筈は奈落へ沈み中程は。火焔と燃えて元筈は武藏野の叢に。卒塔婆となると思ふ時。自が持ちなれし十二の手箱のその内に。唐の鏡が候が一大事のある時は表が曇り見え分かず。裏には汗をかくと聞く是をも鷲が舞下り。地二つに蹴割り片割は奈落へ沈む一つは又。卒塔婆鏡に打つと見し夢占などといふ事の。あるとは聞けど何故に我身に惡しき夢ならば。人のためにもつらからんと世に味氣なくのたまへば。ハテつがもない世の中の夢は仇夢なるものを。そんな時には花結び偏突などを遊ばして。紛らかしたがよい筈と。又取出す歌加留多 フシ假名に戀しとばかりなり。地かゝる所へ與四郎は顏も目元も狂人の。狂ふが如く走り來て局下婢を突退けて。姫君に抱きつき。何をいふやらうめくやらッしやくりあげてぞ泣きゐたる。地姫君は興覺めて何事の起りたるぞ。心もとなや與四郎よ早う語れとのたまへば。とゝゝゝゝ殿樣のけゝゝゝゝ。局聞いて早う語りやと云へば。けゝ喧嘩をなされた局おはした立寄りどうぢや。どうぢやと口々に問はれていよ〳〵サアけけんくわをなされた。姫君は呆れ果てコハ何事の起りしぞとスエテうろ〳〵涙におはします。詞局與四郎が傍に寄り。これ此方はせけばせく程一倍吃つて理が聞えぬ。地平常の通りに土佐節で樣子を語りやと云へば。打ちうなづきて畏スエテ先立つものは涙なり。謡飛花落葉の風の前には。有爲轉變のさとり。電光石火の影の裡に。ナポスフシ生死の去來を フシ見る事よ。在戸フシ命は金玉よりも重く。義によつては又輕しとかや。地いたはしや我君は。

弓馬の家に生れ來て文武の道を分け過ぎて。戀の山路に入る月の。照手の姫に馴れそめて　フシ淺からざりし契さへ。許さぬ仲と横山の。横に行くこそ口惜しき。ふすまの小鹿仲のよい君に名殘の深綠。柳にやつて暮せども今日は如何なる惡日にや。一度の怒を押鎭め。二度の無念を凌げどもすは。三度にもなりしかば覺悟極めて某に。遣し給ひし言の葉のこの刀をば賜りて。立別れ行く道の邊の一足來ては振返り。二足三足歩みてはなそたの空を眺めつゝ。さぞ今時分一念の刄を拔いて横山が。地首打落し其の身にも御腹召され候はんと。語りもあへず姫君はそれは誠か悲しやと。覺えずわつと泣給へば。在合ふ局おはしたも　フシ皆々聲を合せける。地やゝあつて姫君は涙の隙にのたまふは。恨めしの父上や情なの心やな。誠に人の噂にも夫を憎み給ふとは。聞けど語れど僞の世の陰言と思ひしに。如何なる者が身となり。婿となつたる因果ぞや賤しからざる御身にて。月と花とに憎まれて。世をうき雲のはかなくも。先立たせ給ふかやいつ〳〵よりも今朝は猶。笑顏もようて殿ようて。やがてと云うて締められし此の手ばかりが形見かと。袖に取付き座を打つて歎き給ふぞ哀なる。地然る所へ乘物の左右を圍む武士の。前後四方に目を配り人々を追拂へば。姫君局與四郎も。是は如何なる事やらんと　フシ傍よりも覗きゐる。地高景腰より鍵取出し乘物の錠あくれば。長氏やかて立掛り兼氏の手を引いて　オクリ座の眞へ中に直しける。地姫君一目見給ふよりナウ我が夫か悲しやと。走り寄らんとし給へば。兩人中へ立塞り。ツレ法式なれば叶はぬと苦々しくも突退くれば。地姫君は聲をあげたとひ如何程堪忍のならぬ事のありとても我を可愛く思召さばかく短慮にはない筈と。恨み歎かせ給ひける。弱小栗御覽じ夫ながらも父親の。仇と思はば自をさぞ恨めしう思はれん。その與四郎に云越して夫婦の緣を切つたるに。地某が不幸にて再び詞を交す事。面目なやとありければ姫君は聞召し。ナウ胴慾なお詞や親に似ぬ子はなきといふ。その諺に我も亦さもしい心あるらんと。思召すかやはづかしの。もりて仇名のたつか弓引いて見るのか。口惜しや其の刀貸せ憂き事の憂世の暇をあけんとて。與四郎が腰に手を掛け給ふ。小栗暫しと聲をかけ。詞今云うたのは親子の義理左程に我を大切に。地フシ思ひ給ふか嬉しやな〻今は歎いて叶はぬ事。櫛赤木をさげ尼の跡懇に弔ひ給へ。武士の最期は晴なもの早々其處を退き給へ。それ〳〵とありければ。女房達諸共にあつと涙に答して。

姫君の手を引いてオタリ奥の方へぞ入りにける。地とかく時刻も過ぎぬれば三方に太刀を乗せ。小栗の前に直しける。詞兼氏につこと打笑ひ。先づ御兩所御苦勞の段。御禮申すべきやうも御座なく候。御退屈に思召さん。急ぎ御介錯頼み存ずるとあれば兩人聞いて。御意に御意得候て今更殘念の至り。地ゆる〳〵御用意遊ばせと。慇懃に挨拶し太刀取後に廻りければ。兼氏三方引寄せて刀を右に取りながら。詞いかに與四郎最前も云ふ通り。早く國へ立歸り大岸宮内その外の者共にも。横山を討洩らして無念なと傳へよと。地是を最期の一言にて。腹十文字に切り給へば フシ首は前にぞ落ちにける。地姫君あはて走り出で。頭を撫で身體に添ひスエテ平伏し歎きおはします。地實に理と思ふから兩人の人々も。涙ながらに暇乞ひフシ舘を。さして歸りけり。地さてあるべきにあらされば。フシ死骸は彼處へ直しける。地與四郎はたゞ茫然と。差俯向いてゐたりしが。物をも云はずつと立ち門外さして出でければ。姫君御覽じ我をば棄てゝ與四郎よ。何國へ行くぞ諸共にお國へ連れて下れよと。呼べど答へず頭振り。いや〳〵と手でして見せる。姫君腹をたて給ひ。詞なに自を連れまいとや。只今夫に別るゝと早汝等も蔑るかと。地長刀持つて駈出で給ふ與四郎是はと押靜め。ドモリ詞扨々女儀とてお氣が短い。我々どもが主の敵と思ふはお前の親横山殿よ。然らばその國元へお供はなるまい。はた又傍輩衆の所存もあるべき事。よく〳〵御思案遊ばせと云へば。地姫君も涙ながら優しの者の詞やな。彼を云ひ是を歎くも夫のため。その敵を討てよとは心の中の問答。宮内にも云へ汝も亦。敵を討つに露程も遠慮はないと合點せよ。自も亦夫への心中立てゝその上は。又こそ逢うて語るべしそれ迄は主從の。緣は戻すぞ心底を。水に流すな急げやと。勸めたまへば與四郎も亦泣出す泣節も。後は勇みの一拍子おのれいつ迄おくべきぞ。光陰の三十羽の矢。一つ番ひて横山が老の首。三郎が若木の首雪と櫻の二つをば。無常の嵐に迫拂ひこの。無念を晴らさんと飛上りはね上り互に交す約束の。石に立つ名も石の名の堅き心ぞ頼もしき。實に頼もしき男やと皆々後を見送りし。

第二　照手の姫道行

獨寢に。我が手枕の添臥も泣いて暮する床の内。しばし假睡む暫し間も。夢に夢見る フシ夢なれや。うつゝがましきたはれにも千代もと契るその人はあだし野の露消えて行く。スエテ その亡骸をあへな

くも遂はかなしやつきこめて。せめて櫻もあらばこそ恨は。富士に。立つ煙比べて。燃ゆる我がほむら。親といふ字に思ひかへ。詮方なみだ片思。片輪車に我夫の。なき佛を隱し乘せ オクリ御寺に〈納め御菩提解いつ卷いつの引綱に。お側使の女の童。フシオクリ女綱男綱に手を掛けて フシ御供申し出でにける。ハルフシ心は物に狂はねど。姿ばかりは物狂 風折烏帽子眉深く。直垂の袖結びあげ。ナホス笹の小笹の一枝に四手切りかけて打肩げ。先に進みて玉鉾の。抄らざりし道なれば 謡経 菅頭を。とつて引かせうぞひけや。ひけのの。この車やれ我夫の我夫のナホスフシ姿よし野の花盛り。フシ柳櫻の。たよ〳〵と流石都の御所櫻散りて〈配所の月をだに田舍櫻と眺めやり。長地いつしかあひに相惚れの。一重櫻も重なりて八重九重と契りしに今は仇なれ味氣なや 相ノ山花は散りても。春は咲く散りて。歸らぬ死出の道野邊より。あなたの伴とては血脈。一つにナホスフシ數珠の數。地一蓮託生頓生菩提うかみ給へと木綿四手も涙にぼす間なかりけり。思へば憂しや父上と兄三郎の惡逆はスエテ數ふるに暇なしハルフシ空飛ぶ翼。地を走る。畜類迄も子を思ふ。まして我子の婿がねを。何故頃しも如月に。あへなき御最期フシ詮方なし。後に殘りし自は浪に揉まる〻棄小舟。歌迷ふ戀路のむごや辛や。胴慾や。ようは殺せしその悲しさを。今に忘れぬナホス涙川。涙の雫遠近の。たつきも知らぬ山中をたどり。たどりとみくり坂。フシ上りて君に逢初めし。姿優しや目にちら〳〵と見る目恨めし。戀すてふ。わが名はまだき立ちにけりホフシ人知れずこそ。思染めにし染羽織。繻子の下着に錦の上着。金元結の糸筌髪二つ刀の落差し。謡葉で華奢で公道て。どうも堪らぬ形振もなか〳〵今は物云はず笑はず泣かぬ石佛。謡経髪はおどろの如くなり。足手の爪も取らざれば。鷲熊鷹にさも似たり。ゆかしなつかし我夫と泣くより外の事。ぞなき。あはれ昔の戀草をキンオクリ待乳が〈原に相模川たとへ姿はさがなくと。せめてそれかと一言を互に交すものならば。何の思か有明の月日の經つに從ひて。フシ猶いやましの思草。朝な夕なのかこち草足柄箱根玉津島。貴船や三輪の明神は。夫婦妹脊の睦言を守らんとの御誓。神も佛も僞の空定めなき浮世やと。車の前後にとりついて或は。歎き或は恨み。もつれもつる〻藤澤の御寺に 三重こそは着き給ふ。地天は勾踐を空しうすることなし。時に范蠡なきに非ず彌猛心の一筋に。白き小袖に上下の淺黄につる〻露の身や。ゆかりの藤野梶右衛門人忍ぶとて編笠の。日

陰者とは誰も知る藤澤寺に到りつつ。御墓の前に脆づき樒さゝげて水を向け暫く禮拜落涙の。數行の内に伏し倒れそゞろに時も移り行く。あれ大勢の人背と立つ手立つ足定まらず。横に着るやら笠の緒を。結び止めぬ後や先。先づかたへはらに入りにけり。是も同じく白裝束御墓詣の禮袴。大岸宮内を始として吉川中右衛門。原田長右衛門武内只八。寺井吉左衛門その外數多入り來り。各御廟に拜をなし心の玉の數々の。詞の品も事終り御寺へかくと案内す。暫くして和尚立出で。ハレヤレ御奇特の御參詣。誠に御主人不慮の儀につきお果てなされ。さぞ何れもには殘念に覺されんさりながら。劔に掛り水に入るも皆是。前世の宿業つたなき故なり。その業障といふものは名將勇士も遁れ難し。さら〳〵宿意あるべからず冥途の旅の土産には。念佛讀經の外は身にあづかるものなしと。御敎化あるも殊勝なれ。大岸涙を押へ有難き御敎や候。死の緣無量なればいづれを是。いづれを非とや申さん。殊に武士の家には太刀先にて命を果たすは。本望の死とや云はん。主人は天晴果報の者と存じ候。とにかく御回向頼み奉る。扨我々共も。思ひ〳〵に身上を稼ぎ候故面々故郷へ立別れ候。何れも久々の馴染故又逢ふ事も知られねば。行末越方をゆる〳〵話し申さんため御寺を暫く借り申したう候。御邪魔にもなり申さんとあれば。是は少しも苦しからず。今日は夜共にゆるりと名殘惜しまれよ。それ煙草盆お茶持てこい。酒は法度で入らねども今日の馳走が盃と。是様々もてなし入り給ふ。然る所へ梶右衛門外に立寄りて。寺井吉左衛門殿やおはするちと御目に掛りたしと云ふ。寺井立出でヤアお出なされた。幸ひ傍輩衆も參會なれば。首尾見合せて申出さん御氣遣あられな。まづもつて忝い。意趣は先日申す通りと。懐中の一通相渡し。宜しく御披露頼入るとそ申しける。待遠ながら少しの内それに控へ給へと。寺井は内に入りにける。四方の話も事濟みて右の一通。宮内が前に差出せばこれは何かと押開けば。何々願書の事私儀不慮に亡君の御勘氣を蒙り。身腑を惱し罷りあり申し。一旦は何卒愁眉を申開かんと存じ奉り候處に。思ひも寄らぬ御仕合御赦免の願も絶えはて。明暮本意なく愁歎の涙沈み罷りあり候うちに。内々思召立のやうほのかに承り及び。一眼の龜の浮木に逢へる心地仕り候。あはれ御人數に加へられ下され候はゞ。一命を輕んじ泉下に於て。御勘當をもお許し下され候やうに。御歎き申上度候と文章玉の響

あり。宮内打ちうなづきム、梶右衛門殿の願よな。近頃奇特の御心底然し内々の儀も大勢にては。却つて本望を達せん事なか〳〵叶ひ申すべしとも覺えず。結句は無用の力みを出し。萬人の嘲を受けんは雪の上に霜を受くるの恥辱たるべし。然らばとかく面々稼ぎの渡世もあらまほしけれ。その上大殿より御勘氣の御身なれば。萬一儎あるとも御勘當の仁の儀。某一分の了簡にては。なか〳〵一列の人數に思ひもよらずとあれば。吉左衛門つつと出で。段々の仰せられやう御尤千萬に存じ候。然しこのお願は某めが。身に引受け申上げねばなり申さず候。されば大殿御勘當遊ばされ候根元は。私兄吉藏五年以前病死仕り。則ち花山寺にて土葬致し取置き候その時分。あれなる梶右衛門新刀二尺八寸の刀を購め。死身試し度と日頃心掛くると雖も。似合の胴これなく寺々を探し。土葬の身體を尋廻り候處に。某が兄とも知らず嬉しき儘に墓を毀ち。かの刀にて思ふ儘に試しすて候。かやうの不屈の仕方兄の敵同然故。一討と存じ罷りある處に。殿樣御了簡の上御勘當御追放仰付けられ候。尤も我に於ては兄の仇に候へども。武士の心掛け物の役にも立かね申すまじき健氣者と。今に至りては却つて梶右衛門心底を感じ候。是度この一列を除き候ては。私の宿意にて存念を無に致し候と。某がはづかしめ梶右衛門が心殘りの程。地思ひやられて哀に候。某めはこの御人數をおはづし候とも彼をお加へ下され候はゞ。生々世々の御恩ならめと詞を並べ落涙す。地宮内横手を丁ど打ち頼もしき梶右衛門。諦めたりや吉左衛門。幸ひ殿の御墓の前とてもの儀に御勘氣の御願申上げ。共に力を合すべしと。御廟前に脆づき。詞梶右衛門事吉左衛門同意に愁歎仕り。御赦免の御願重々歎き申し候。御宥免下され候はゞ有難く存じ候べしと。地主君まざまざゐますが如く申上げ頭を垂れて嚴なり。暫くあつて振仰向き梶右衛門を呼出し。まづ御喜あれ御勘當御免遊ばされ。先知二百石相違なく下し置かるゝ旨。仰出でられ候間御禮申上げらるべしとあれば。あつとばかりに梶右衛門こは有難き次第とて。只俯向いて詞なし。地三人一所に拜をなしせきくる涙押へかねフシ何れも袖をぞしぼりける。ハルフシかゝる折節。照手の姫足弱車弱々と。心ばかりの引綱も力車にやるせなくやう〳〵御寺につき給ひ。近づく方に見し人は大岸宮内。その外殿原立並び互にそれと見るよりも。是は〳〵とばかりにてフシ先立つものは涙なり。地やゝあつて姫君は誠に小栗樣に別れてより。餘り思のやる方

なさ父母の目を忍び。なき御骸を此の御寺に送り屆けん我願。わざと狂女に身をやつし遙々是迄參りしなり。地主從の機緣盡きざるや是にて廻り逢ふ事も。三世の緣不思議やと スヱテ 又さめ〴〵と泣き給ふ。詞宮内頭をさげ。誠に形は產めども心を產まぬと申す如く。親御樣に變りし御貞節の御志感心仕り候。地殊に大殿の御遺骸を是迄送り下され。我々共不思議の御對顏に與る事。未だ侍の冥加にも。盡果てざるかと ッシ 各袖を濡らしける。地和尙立寄り御棺の蓋を取り。何れも拜し給へやと目を塞いでぞ觀念ある。宮内を始め人々は御棺に立掛り。無念の氣色面にあらはれ。拳を握り牙をかみ胸まで來る憤怒の涙。思はず知らず諸共に。わつとばかりに泣入りける思ひ。やられて道理なり。地宮内やう〳〵涙を押へ。口惜しや眼前に。主君の死を見て何の面目に。靑天白日を見る。お果てなさるゝ時分はさぞ御無念に思召されん。仰せ置かれたき事山々あるべしさり乍ら。その段は此の宮内めが肺肝にとくと徹してござる。詞たとひ敵鐵の城に入り呂馬童が勢をなすとも。御本望は達します少しも御氣遣なさるゝな。地冥途の御供は大勢で。やがて追付く追付くと又。さめ〴〵と泣きにけり。地和尙重ねて。詞娑婆の涙は未來の熱湯なり。到岸衆生觀ちうぢう。十方菩薩菰圍繞。引攝安養極樂界。地頓生菩提正覺位の文を唱へ。フシ御廟へ納め給ひけり。地姫君涙にくれながら。さるにてもはかなきは世の有樣や。昨日の花は今日の夢覺めてはもとの夢人よ。うつゝに歸る物語この被りたる烏帽子こそ。父横山の召されしを狙ひ寄りたる我夫の。遺恨の太刀先二ケ所迄跡は殘れどその人は。名ばかり殘る悲しさよ。親ながら父ながら恨めしの烏帽子やと。彼所へかつぱと捨て給ひ スエテ そゞろに袖をぞしぼらるゝ。地時に竹内只八飛んで出で。なに横山殿の烏帽子とや思へば無念晴れやらず。いで物見せんとつつと寄り土足にかけて踏まんとす。詞宮内暫しと押止め。それは若氣のなす所。不義を誅してその人を誅せず。高位の被り物いさゝか粗末にすべからずと。地うや〳〵しくも墓に乘せ御墓の前へ供へ置き。懷中より小合口を取出し。詞この合口と申すは小栗の家の御秘藏龍の丸と申す切物。先年某に賜り候唯今返上仕る。地御尊靈これあらば再び御手をおろさせ給ひ。御鬱憤をとげらるべしと烏帽子を三刀さし通し。まづ〴〵敵は討得たりさらば何れも燒香あるべしと メクリ 一々へ次第に禮拜す。地はるか下りて大岸も涙に香をひねりかけ。我々かくてありながら唯今迄打

過ぎ候儀。さぞ腑効なく思召されん。
同誠に御存生の御時の侍共。或は駈落臆病をかまへ己が悪を被はんために。志の士をそしり忠義も口先にては成るものよ。
塩時に臨んでは金鐵も朽つるものと己が不義を押隠し。舊恩を思ひ仇を報ふの心は露ばかりもなし。
詞三百六十餘人の中僅かに四十七人倶に天を戴かざるの儀もだし難く。同じく土を踏むの分恥ぢずといふ事なし。是によつて御意趣を繼ぎ奉るべきと存じ立つよりこの方。一日三秋の思なり雨に立ち雪に佇み。
塩老身の者病身の輩しば〳〵死を勸め。螳螂が斧を廻らし事に臨んで恐れ。計をなすは勇士の嘉んずる所先聖の格言に。たとへ勢盡き力きはまり身はひし〳〵になるとも。横山父子が首を此の烏帽子の如く鉾先にさし貫き。御孝養に備へん事踵を廻らすべからず。かねて認め置きたる各一味同意の起請文。懐中より取出し恭くぞ讀上げける。
塩敬つて起請文の旨趣左にあるか。こゝにしきりの年。横山左衛門といふ者あり。亡君の仇家臣の敵なり。然るに大岸宮内試に。義心の起し毒夫を刺さんとす。今連判の武士等いやしくも弓馬の家に生れ。僅かに箕裘の塵をつぎ白刃の踏んで。君臣の義を恥づる事なからんとす。幸ひ何ぞ是に如かんもし。約を變じ義を失ひて敵に後をあらはし。二心あるに於ては和國の宗廟伊勢兩宮。弓矢八幡大菩薩天滿天神春日四所。氏神産神八千戈の神。惣じて地類八百萬神冥罰を忝うして。武名永く朽ち天運まさに盡きて。人非人の恥を留め。愛染明王の利劍に形を裂かれ。死しては三尊六道の能化地藏菩薩。諸佛の愛憐にはづれ紅連。大紅連焦熱。大焦熱阿鼻叫喚に墮罪し。先祖の靈魂に憎まれ因果。長く子孫に傳へん依つて約盟の狀如件。今月今日大岸宮内吉勝。嫡子力之助吉遠。吉川中右衛門重祐原田長右衛門信時。瀬尾九太夫正光笹井藤内秀雄。片桐源吾高祐神邊與四郎正遠。竹内只八廣次葉島十五郎信元。堀口彌五兵衛金忠。同安左衛門武虎遠松の了圓坊を始として。忠義の武士四十七人我も。我もと立掛り股を突き肱を刺し。眉間より血を出しッシ互に。勵むぞ潔し。
塩珍しからずと雖も各我等が命は。君のため義のために奉る。
同大行は細瑾を顧みず。事に臨み恥辱を取り喧嘩口論なすべからず。
塩韓信が股をくゞるの心を持ち大事の命と思ふべし。互に是より立別れ時を見合せ合圖をなしすはといはゞ油斷すな。手組手合せそれ〴〵に殘る所もなきあとの。寺の晨朝こん〳〵と。打つや。打つ音の一調子。調子もよしや氣もよしと各。勇士の別れなり。

第三　禮之部

地生ける世の今日の煙ぞまづ絶ゆる。明日の薪の身は殘る昔の劍菜刀も。あるにまかせて賣つて食ふそれさへなくて今日二日。女房や嫁は帶しめて堪へ忍ぶにも老武者は。風に揉まるゝうつぼ木の力なきこそ道理なれ。地嫁のおまき枕許に立寄り。さぞ堪へ難うござりましよ是なと一つとばかり。桃五つ六つ枝ながら膝元近く差出せば。源左衛門打ちうなづき。同ヲ、過分々々。然し身共は寢てばかり居れば。左程に苦しい事もない。女房や其方賞玩めされ。稚き者には毒なるに。源太郎には無用に致されよとあれば。御氣遣なされまするなかみ樣や私は食べました。源太郎は今朝家主殿にて朝食を振舞はれ。機嫌よく遊びて居ります。ヲ、嬉しうおじやる。さあらば一つと食初めて。ホ、見かけより風味がよい門商人の賣りに來たか。おまき聞いてお氣に入りましたらばいか程も上げませう。隣裏から此方へ降つたる枝に澤山生つてござりまするれば。何程なりとも騙れますと云へば。源左衛門氣色を變へ口なる桃を吐き出して。これ嫁御。曲もない道を思ふ者は疲れても。曲れる木の蔭に息まず。渴けども盜人の名ある水は飲まぬといふ。數ならねども小栗が家來片桐源吾高祐が親。源左衛門高秀今年七十三になる迄。地紙一枚でも掠めた事はない今日といふ今日。盜んだ物を口に觸れて腸を汚して無念な。老いて死せざれば辱を見る悔しやと。齒がみをなしつ口說くにぞ。地おまきは迷惑身に餘り扨々女心の淺はかにて。誤つた事を致しました今よりしてはふつふつと。嗜みましよ止めませう。御機嫌直し下されとつシ聲を。あげてぞ泣居たり。地姑も涙ぐみ。ナウかく迄孝行なる人を何とてすげなく仰せらるゝぞ。嫁は我子の妻なれど子の源五には去年より。何處に居るとの一言の言傳もなく文も來ず。不孝な子さへあるものを他人の身にて我我を。いたはり給ふ志嬉しと思ひ給はずやとつシ不覺の。涙せきあへず。同源左衛門ほゝゑみ。老のひがみに由もない事を申して。嫁御の志を仇に致した。地漢王に勸むる王母が桃。千歳の命延ばはらんと笑になせど氣の浮かぬ。顏と顏とを見合せて泣くより外の事ぞなき。地かゝる所へ由ありげなる侍の。大小衣服花やかに僕に持たせる替草履。仁體らしき風俗にて門の戸あけて入らんとす。地女房やがて立出でて誰そと咎むる笠の中。ヤア源五樣かなつかしやゆかしやと。覺えず知らず手を引いてオクリ内にへ誘ひ入りければ。地母は見るより泣出して恨めしの

我子や。年月戀ふる兩親の心を酌みて一筆の。文書く暇もなかつたか無事なと云うて言傳を。云越す口は持たぬかや五つや三つの嬰兒も親をば慕ふ習ぞや何程むごい者にても。妻子は可愛いものなるにかく淺ましき目を見せて。如何程其方が結構な形したとても人は褒めまい誹らうとしやくりあげてぞ歎かるゝ。詞源五承り。成程お恨みの段御尤さりながら。朝暮ゆかしくは存じながら。渡世にからまれ心ならず御無沙汰致しました。この度奉公の口あつて東國へ下ります。伴共は今朝京都より直に立ち候を。私儀は斷り申して御兩親へ御暇乞のため。この地へ罷下りました。地まづは御息災の御尊顏を拜して滿足に存じます。親父様はどれに御座なさるゝといへば。源左衞門むつくと起上り珍しの源五や。詞なに東國へ下るとや一段々々。拙者めも心は逸れども老いさらぼいたれば。何の役にも立つまいと思うて思立たぬ。大切な契約もあらんに親の顏が見たいとて。立寄つたは不覺ではあるまいか。逢ふは別れと諦めてゐれば。名殘惜しき事も何にもない。寸時も逗留は無益夜道をかけて追付きやれ。地然し内儀は久々の對面話したい事もあるであろ。婆も此方へ〳〵とノシよろぼひ彼處へ入りにけり。地おまきは傍へ立寄りて恨みつらみを云ふならば。千日千夜語るとも盡きようやうには思はねど。逢ふ嬉しさに忘られしマアこなさんには御無事にて。御内證もよささうで何よりかよりお嬉しい。おいとしぼいはお二人に不自由な暮しさせまする。かみ様とてもわしとても針手の利かぬ悲しさは。せめて生計と元結をひねり習へどはかゆかず。親父様には耳搔や揚枝削りて源太郎。賣りに出してもそれはそのどこのはなへも屆かねば。地地黑地なしに帶迄も質屋の藏で年とらせ。鏡臺文庫もあとの月心齋橋へ嫁入させ。はきちぎつたる貧乏に石で手詰めたやうになり。お二人様も昨日から少しの物もえ參らず。お年寄られた上なればお命の程氣遣で。今朝から泣いてゐましたに天道人を殺さずと。今日お歸りの嬉しさよ女夫の仲も金銀の。無心といへば何とやら恥づかしけれど孝行な。お前ぢやものとフシほのめかす。詞源五聞いて。その段は云はぬとて推量した。豫て心に掛つたれども。身一つをさへ過ぎ兼ねる浪人の營み。この度東へ下るに就けても。やう〳〵と路銀の用意ばかりなれば。合力致す餘計はないありついてもあるならば。地その儘普便致さんそれを力に待たれよと。表面ばかりの挨拶す。女房につこと打笑ひ。詞なんのそれに違ひがござらうなれどもそ

れ迄は。老體のお命の程を存じませぬ。
地旅遣ひは有り合せとやら聞くものを。少しの貢なされても不自由な目も見給はじ。それともならぬ事ならば是非とはいかで申すべき。三つ重ねたる御小袖のあついやらして汗が出る。一つは脱いで行き給へ平にと云ふも氣の毒や。同源五えせ笑ひ。金の無心は最前も云ふ通り衣服の望も叶はぬ事。ヤイこの小袖はな。身上窠ぎに下るにつき。頼もしい町人衆の東の晴れとて送られたれば。我物にて我物に非ず。最早親父も七十餘花實も咲かぬ腰拔なれば。死なれてもよい時分。母人はまだ手足も確かなれば剃りこぼちて。鉢でも開き給はん其方も若役に。水仕奉公しても悴め一人は養ふ筈。何の案ずる事あると慮もつかざる挨拶に。女房は涙ぐみ。ヤレ源太郎父様に土産くれよと泣けよかし。せめてこの子に百錢の合力あれば。四人が今日一日は暮します。どうぞ〳〵とかき口說く フシ涙は袖にあまりけり。詞源五氣色を損じ。ハテしぶとい女ぢや。百錢の事はさておき一錢もならぬ義理あればならぬ。かゝらうと思はぬ子なれば可愛いとも思はず。地其所へ行けと突倒せば。呆れもやらで女房は夫の顏をつれ〴〵と。見上げ見下し打守りわつとばかりに倒れ伏す。地母悔へかね走出で扨も邪險や胴慾や。汝は鬼か畜生か生ぬ仲とは云ひながら。世に大切に育てたる恩を忘れてそもやそも。つかれはてたる親の身を餓死て死ねとは何事ぞ。天の鏡の曇らずば當らん罰の恐ろしや。云はじ恨みじけがらはし。親とな云ひそ子と思はじ。見るもなか〳〵腹立やと。尻目に睨む血の涙 フシ袖を被ひて入り給ふ。地源五はとかう答なく後姿を伏拜み スエテさしうつむいてゐたりけり。地女房覺えずすがりつき。同ナウ源五殿こちの人。姿形は古の我夫ぢやがお心は。いかなる天魔が入替りかく。淺ましき振舞ぞや常は正直正路にて。廣い家中に又とない親御様にも女房にも。孝行者と名にうてゝ我身も自慢に思ひしぞや。この月頃の憂さ辛さ貧しき中にお二人へ。心一杯孝行に宮仕ひしも自が。冥加と思ひ一つには此方へ立つる心中を。逢うて語つて恩にきせ。禮云はれうと思うたに皆仇事になりはてし。神の咎か狂亂か今の邪險な事共を。覺えてござるかさりとては淺ましき身の上やと。ゆすり動かし絶入るばかりに泣き給ふ。地源五顏振上げ身に望ある侍に。狂亂とは忌々しや一言云へば濟む事なれど。親妻子にも見せぬやう固い誓紙を書きたれば。邪險とも云へむごいとも云へ言はぬは君が爲ぢやものと。ずつと立つて出でければ女房せ

いて走寄り。胸ぐら取つて引据ゑ。詞起請誓紙とあるからは狂人の性が知れた。島原の古狸か先斗町の白人狐か。地正體をあらはしやと髪も頭も遠慮なく。叩きむしれど取合はず。契りし人は武蔵野の草葉の露の後にては。知れようとばかり云捨てゝフシ表をさして出でければ。地女房は身もだえしてエ、無念口惜しや。色と色との争ならば蝦夷が千島の末迄も。付き纏ひても行くべきにおいとしやお二人の。貧しき浮世渡りにも我を頼りと宜ふを。見捨つる事の悲しきぞや。子は不幸にて捨つるとも嫁の節義は背くまじ。この身一つになるならばたとひ何年後なりとも。尋ね廻りて恨せんそれ迄の約束に。この子を連れて行き給へと源太郎が手を取つて。框の外へ押出し。怒を忍ぶ目の中のフシ涙は雨と降らせける。詞源五撃を靜めム、尤々。然し幼少なる者族を連れては行かれぬ。迎ひの人を越す迄は不承ながら介抱を。頼入るとぞ詫びにける女房聞いていや〳〵。ます花のある御方に義理も不承も何もない。下女や婢に身をなしてお二人様を養ふに。地この子があれば妨になるならぬ。ならぬと戸を閉つる。地源五は是非もなき顔にてそろそろ手を引き出行けば。流石別れの悲しさにそつと又戸を押開けて。詞ナウ源五殿此方には悔やみはせぬが。どうぞよい思案はないか。今一度此方向きをれつら憎やと。地恨むる中に奥からは。おかた。おかたと呼ぶ聲に。あいと答へて入る足の又立留り聲をあげ。誓文戻る氣はないかどうぞ。どうぞとひたすらに問へど答へず腹立やと。走り出づればおかた。アイ。地おかた〳〵とせはしなき老の心も破られず。男去なすも口惜しく色と義理との二筋に。結ぼほれたる心の糸フシ是非もなく〳〵入りにけり。地源五は迫る義の道に行きもやられず一方に。茫然として居たりしが。きつと思案を廻らし腰の刀をすらりと抜き。源太郎を引寄せ心元を刺通し。彼處の井戸へ投げ入れて胸押しさすり目をすりて。さあらぬ體にて行く所を源五。源五と聲かくる後振向けば父が顔。窓より外へ差出すはつとばかりに立寄れば。源左衛門涙をはら〳〵と流し。詞妻子の愛も父母の恩も忠の一字に見破つて。地さつても立てし心底や天晴武士や不便やと。聲も震ひて褒むるにぞ。問はれてもるゝ義の涙フシ頭も上げず泣居たり。詞源左衛門涙を押へ。忠臣は孝子の門より出づるといへり。汝が孝は曾參にも恥づかしからじ。二人の女の恨より爺め一人が悦は抜群に深い。死んだる孫は不便なれども。お主への奉公と思へば残念にも思はぬ。金鐵の心をもつて

仇を報ぜんにたとへ横山。ひこう護身に固むとも。やはか仕損じはせまい。忠死の名を石に殘して。後世に謳はれんと思へば。我子ながらも羨し。地忠義の旅の門出に祝はんと袖より金子取出し。詞コリヤ。この金子はな。主君御生害と聞くより即日彼の地へ立越え。鬱憤を散ぜんと旅の用意に貯へしが。地はからずも老病におかされ手足も自由ならず。この通りにて敵に向はゞ又もや返り討に逢はん時。一家中の恥と思ひ堪忍の胸をさすつてゐる。詞この月頃の貧苦の責たとへ四人の者は。餓ゑて死ぬるとも忠義の金は遺ふまじと思うて。女房や嫁にも隠し置いた。今汝が我に代つて行く旅の路銀にせよと投出せば。地源五三度押戴き。誠に義を重んずる武士の志は。割符を合せたる如くにて候。詞是御覽候へ拙者めも廿兩の金子は用意致した。最前御不自由の體を見受けまして。親の養妻子の爲に五兩三兩は殘し置きても苦しからず候へども。宮内殿より此度の役にとて配分致されたる金子を。私の事に遣うては孝を先にし。忠を後にするの譏を憚り。母人へも邪險な詞を聞かせました。地旅の用意は手前に有合せ候へば。御所持の金子は留め置かれ。老の助に遊ばされ候へと云へば。詞源左衛門詞をあらゝげ。某君に仕へる事三十五年。高恩を汚してむさむさと疊の上にて死ぬるが無念な。思込んだる志は仇になれども一心は。猶此の金子に付添ひ彼の地へ立越え。各の潔き働が見たい。地我が俤を見ると思ひ其方この金を懐中せよ。是生前の面目とスエテ涙ながらに云ひければ。地源五はつと心服し有難き御仰せ。節義を包む此の金子道中拙者が御供し。宮内殿その外一味の家中へ披露致し。御老身の淺からぬ實義を申述べん。詞拙私が金子をば憚りながら殘し置きます。地形見ながら御覽ぜと窓より内へ差入るれば。源左もにつこと打笑み惜しからざりし命さへ。詞敵の首を見る迄は永くもがなと祝ふ身の。急げや源五。さらばでござる親父様ヲ、さらば。地追付吉左右申しませう。互に顔を見合せて。未來を契る親子の緣世に。睦じき暇乞夕日傾く老武者なれど。心と忠義に片桐の朽ちずしをれず見送れば。我は若木の桐のたうとう〳〵立つや手束弓。心許すな許さじと義に勇みたる不敵者。末の世迄の物語と皆人。耳を欹つる。

第四　智之部

新枕伏見と。よみし撞木町。色と菩提の一つ門。乘合を待つ旅人が廻文包む風呂敷も。椶粽を取荷ふ小オクリ袖を

へ引かれて引きがてに。是も愛宕の。御利生かの フシ面白や。ハルフシ面も白し。身も白し。冠着さうな厚鬢は京の水とや名を流す。その戀草に世を宇治の フシ茶師の手代がたま〳〵に。君がこい茶に。うかれ出てくればお留守と立歸る。緣はうす茶と恨むらん三ケの。濡の港にも。負けぬは爰の遊色と フシ榮は。日々にまさりけり。地大岸宮内吉勝は淫酒の二字に身を染めて。心の友としぐみたる顏は變らぬ四人づれ。刀もやめて一腰をさし合くらぬ親と子の。戀取持つとさゝめいて フシみすやが方に入りにける。地亭主や女郎立ちかゝりいつ〳〵ながら御勿體。もたせぶりかやいやらしと耳つかまへて引廻す。禿はこまたとりあしの我手に轉けて詫をする。何程固い惣髮にそつた朱鞘の太刀作も。かうした廓の兵法は裏へ廻ると大笑。末社の林好座敷よりつか〳〵と走出で。詞大方今日の御出を注進あつて承りました。その上變つた御一座の由。亭主も殊の外喜悅の眉を開き。暑氣お凌ぎの御馳走に庭の植木も飛石も。地男共が請取つてむつくりと起きるから。乾かぬやうに水びたし。お客やこちは酒びたし フシヤイ御銚子と騷ぎ出す。地宮内手水使ひながら。詞ハテ此の釣舟の花は餘程心のある活けやう。亭主が手際と見えぬ何人が活けた。ア、イヤその筈でござります。山本かもん殿お客と昨夜から是にて。今朝歸るさに活けて歸られたと云へば。誠に茶なども餘程立てらるゝと聞いた。何れも御覽候へ扨々をらしい事の。惣別子供や女郎にもかうした事は少しづゝさせたい物ぢや。力之助なども餘り頑固にて。宿に居る中は卷藁と兵法ばかり汗水になつて心掛くる。今時の武士はそれは古い。地少し色といふ事も亦この廓に名人あらば習やれ。ア、さりながら侍は文武といひ賞人は。それ〳〵に身をゆだね子供女郎はその身器量第一から。樣々藝のすき〴〵に心を移す。かく一座する各や身共等とても。今宵はみすやの座敷に遊び明日は又如何氣の變らん。地朝には紅顏あつて夕にはといへば。一座も林好もその後はどうでござります。何と。何とゝ興ずれば。詞ハテ夕には此の撞木町の木の通りたる色に遊ぶと。地騷ぐ拍子に名香の誰が炷きかけてほんのりと。扇子の風にそつと來る憎や隣の座敷から。つげといふのか空炷きかと床のあたりへねぢ向けば。地平日に變りて掛物に弘法大師の畫讃をかけ。獅子の香爐も時代めく。青海の大香箱 フシ清らを盡し飾りたり。詞宮内手を叩いて亭主を呼び。先づ今日は常日より種々の馳走嬉しうおじやるよ。殊更此の掛物は餘り酒

落すぎたが。揚錢拂はぬ眞言坊主を禱るのか。地石臼の目切講かと惡口のある程云へば。面々手を打ち可笑がる亭主も共に打笑ひ。詞さればでござります。此の掛物に就いて哀なる物語の候。その御盃の向ふへ廻り候はん中。語つて聞かせ申候べし。一文字屋の揚卷樣何時の程よりか。御子息の力樣を戀ひこがれ給ひ。お連樣へ賴んで文は八百萬にかさなり。指髮迄切つて遣はされても。氣の强い若衆樣で御返事がござりませぬ。そこで揚卷樣の智惠をお出しなされ。若衆の氏神弘法樣の御影を掛け。一七日が間精進潔白に朝夕三度づゝの水垢離にて。地强い戀の禱りやう唯今も湯殿に垢離とつてござります。今日の御一座は揚卷樣御願の叶ふべき瑞相。何卒賴み奉ると揉手に數の舌を卷く。詞宮內聞屑けヲ、成程々々。內々皆の話に此の事は聞いてゐる。地それ故同道致したり。幸ひ力之助事も近日元服させる筈前ぶりのある中に今日は拙者が取持つと云へば。亭主や女郎一同に是はしやれます〳〵と。夕影凉しき水垢離に今日や願の叶ふかと。緣を結ぶ揚卷は人の戀路を緋縮緬。脛も浴衣も裾高く駒下駄鳴らしかいやりの。戸を押開けて座敷に出。宮內樣何れも樣ようお出でなされました。私もこの中はちと思ふ事候て佛樣へ御無心申しかけ。地固い身持で今日七日唯今も垢離を取り。この姿無禮は御免なされませと フシにつこと笑ふぞ面はゆき。地宮內盃を取上げて揚卷殿差しませう。爰は一つと强いられてお久振りで無理聞くと丁ど受けてじろ〳〵と差したい方へ目がゆけば。酌取る禿呑込んで若衆の傍へ持て行けば。生心ある力之助。初心な顏も盃も フシ共に紅葉ぞ散りにける。地式部靑柳林好もさあ〳〵揚卷樣の願が叶うたわ。弘法樣への願ほどきは長芋午房の高盛よ。中書島の辨天樣へ鰻進ぜて放生會。扨宮內樣皆樣はお氣を通して御祉の。蚊帳の中へ宮移し揚卷樣と力樣の。御床は稻荷明神と オクリ笑ひて〈內に入りにけり。地戀の初陣若武者の震を隱す溜息に。疊の目讀む廓ひねることぼれかゝれる前髮に。笑靨被ふぞねたましき。地女郎もさすが打付けに物も云はれず胸の火に。煙草吸付け差出すハテ。からい物をと顏振れば。ヱ、初心な事を。町方の子供衆は十二三から小癪にて。仲居や腰元に嬰兒產ませて父樣と云はせます。なんぼうお前が無情うても女郎の一念は。生きながら幽靈になつてゆくげなが フシ恐い事ぢやともたれよる。詞力之助慇懃に。誠に數ならぬ私に千束の玉章。わけて淺からぬ志をかばかり嬉しく候。我身も岩木ならねばその御心を

無下に致すにあらねども。大願のあつて今一兩年も色に染む事はふつ〳〵となりませぬ。地御緣があらばそれ迄待たせ給へやと。當座遁れの挨拶に揚卷打笑ひ。詞扨も殊勝な御事や然し左樣な長精進は。地中落するのが法ぢやげな帶解かんせと取付けば。ハテ迷惑などうしやると遁げんとするを引留め。是々聲立てさんしたら親父樣の叱らんしよ。平に〳〵と止める手に帶くる〳〵と解きければ。肌に地黑の染小袖女模樣と見答めて。揚卷くわつと赤面しさりとは憎き御仕方や。初心な顏も無情きもかうした仲のある故に。欺し給ふか曲もなや姿容は劣るとも。深き心はその人に負けじ劣らじ妬ましと。恨みかこてば力之助樣子はどうも明かされず戀と思ふを幸ひに。詞ヲ、成程顯れたれば是非もなし。此の小袖への立分外は見ぬとて立たんとす。地是非にとすがる袂をもならぬ。ならぬと振切れば揚卷今は怯へかね。傍なる脇差拔放し死なんとすれば力之助。是はとあわて飛掛り持たる刀もぎとれば。ほころび出る心の糸覺えずわつと泣出す。折節宮内目を覺し階子をそろ〳〵にじり下り。フシ屏風の外に聞居たり。地かくとも知らず力之助小聲になり。詞命かけての志身に餘りて嬉しけれども。我身はやがて西國方へ宮仕に下れば。假の枕を交すとも長くもあらぬもの故に。地あらぬ別れの悲しさは今の辛さに一倍せん。フシむごきは御身の爲なるぞや。地又此の小袖は樣子あつて別れ居る。母の形見と夢の間も肌身に付けて拜むなりと。スヱテ涙ながらに語るにぞ。揚卷は振仰向き御身の上も何事も。とくより知りて候ふぞやとてもこがれて死ぬる身の。手枕だにも交しなばそれを冥途の土產にて。お前に遲れ一日も此の世に殘り居ようとは。神かけて思はぬなり。地扨又そのお小袖を。母君の形見に詠め給ふとや。さ程ゆかしきお心ならばなど一筆の音便を。折にふれても遊ばさぬ御いたはしや母君は。朝夕慕ひおはしますと フシ語りも。あへず泣居たり。詞力之助きよつとして筋なき事を云ふ人かな。人達にやと云ひければ いや御遠慮なさるゝ者には非ず。自はお袋樣のお側使。瀧と申す女の妹にて御座候。暮しかねたる浪人の親育みに身を賣りて。悲しき勤に沈む事兄弟にも包みしを。お袋樣何としてしろし召され候にや。去りし五月の闇の紛れにおいたはしや徒歩にてお越なされ。人閑かぬ所へ自を御招き遊ばされ。御夫婦の仲絕えし事お前を戀しう覺せし段。聞くさへ涙こぼせしなりお二人ながら此の廓へ。地折々通ひ給ふと聞く此の文體に屆けつゝ。返事を取つて

呉れよかし女郎といふものは。頼もしいものと聞く呉々頼むと宣ひて。むつがらせ給ひしが身にしみ〴〵と哀にて。お氣遣なされますな戀に代へて御返事を。見せ参らせんと受合うてお前を待つてゐましたと。守の中より取出せばそれは誠かなつかしやと。取る手も遲しと押開き涙の中の一筆や。地世の常の心の闇はさるものにて。二世の夫一世の子供に此の世にありながら。地目に見ぬ事さへ叶はぬは。月の桂よりフシ猶仇なる戀き身ぞや。詞昔はさしも孝行なり人の今更變るべき心ならねど。父の叱るを悲しくてかく疏略に致すかや。地それとも母と思ふなら隱れてもなど問はざらん。須彌の高きを知るならば。大海の深きを思へかし靈の歎き夜の恨みに。詞大方は目も泣きつぶし誰ともまだ薄明り見る中に。逢ふ事とては叶はずとも。せめて一筆見せ候へ。恨めしの我子やと。恨の歎はお道理と。文をば顔に押當てゝフシひれ伏し。歎き沈みけり。地やゝあつて力之助くれぐれ過分の志。いつの世にかは忘るべき。その頼もしき心からはこの身を親に不孝者と。フシ見さげ給はん恥づかしや。地天地に一人の母なれば父には隱れ忍びても。問ひ参らする筈なれども身に望ある侍は。母に心を引かれては主への。忠も朋輩の義理も缺くると宣ひ。父の詞の重ければ今の返事もえせぬなり。重ねて目見え給ひなば我如才なき一通。地此のお小袖を添臥の夢を此の世の樂に。朝夕肌を離しませぬと傳へて給へさりとては。ある名ばかりを籌木の由緣と思へばなつかしと。覺えず知らず抱付けば。女郎は心消え〴〵と涙の中に締めかへす。親忍ぶ草思ひ草。それかあらぬか初枕衣引被き三重へ臥しにけり。地宮内は始終立聞にフシ諸共泣いて居たりしが。地思案顔にて二階に行き二人の件に囁けば。打ちうなづきて兩人は急がしさうに出でて行く。亭主々々と手を叩けば。心得顔に盃をフシ持つて二階へ通りけり。詞宮内云ふやう。揚巻が心底餘り不便な。連れて歸つて力之助に添はせたい。何と請出す事はなるまいかと云へば。地それは旦那の御器量次第。糸つけて凧上りになされうと。車に乘せて木乃伊にしようとも。藥代は百五十兩御勝手次第と申しける。地親の話に目が覺めて恥づかしいやらうろ〳〵と。彼所や爰に隱れ居る然る所へ兩人は。すた〳〵云うて立歸り宮内に金子差出せば。こりや亭主幸ひ爰に二百兩。宮内が嫁にするからは隨分そこらを見事にせい。頼むと云ひて投出せば亭主肝をつぶし。詞より物の中から刺身にする魚が出ると。浪人の家から二百兩の小

判が出た事は。地末世末代ない事ぢや。夢ではないか夢ならば フシ覺めな〳〵と戴きける。地宮内打笑ひかうした事も潛上づく。揚卷は大岸宮内が請出したと。世間の人が知るやうに。萬事差配を賴むとて ォクリ皆々へ連れ立ち出でにける。地花車や禿は一二町送りて歸る追分の。道を東へ行く野邊の露と答へて今消ゆる。命も知らず揚卷は後へ下るを宮内立戻り。歩みつけぬで心勞なか。手を引かうかと戲れて。立寄るふりにて刀を拔き胸のあたりを刺通せば。人々あわて立戻りコハ醉狂か狂亂かと。各不審はれやらず。地揚卷ほつと息をつぎ。いとたゆげなる聲を出しナウ宮内樣。詞自には何科あつて胴慾なと。地恨むる聲も引く息もサッシ弱り。行くこそ哀なれ。詞宮内聲を靜め。嫁男と契るからは憎からうやうはなけれども。情なきは殺さねばならぬ仔細あり。樣子を聞いて思諦めてくれよ。されば某を始め四人の者。身を放埒に持つ事皆敵を欺く計略。二世とかねたる妻にさへ洩らさぬ事を其方が。よも知らうとは思はねど。最前其方が何事も。夙より知つて居るといふ一言心にかゝる是一つ。拔又力之助が母より文の遣はせまじき事にあらねども。あつたら侍に未練な心を起させては忠義の妨になる。其方も侍の娘と聞いた。力之助に別れては必ず後に殘るまいと誓ひし詞に僞はあるまい。左程倅を大切に思うてくるゝ心底からは。とても長らへぬ命を今爰で死んでくるゝは。男の疑をはらし可愛い力之助に忠を勵ますためぢや。すでに四十七人の妻や子が或は自害し。又は相對の離別をせられ。尼法師になつて跡を弔ふも皆是主君を思ひ。夫に忠を勵ますの實義なれども。今其方が某の手にかゝつて相果つるは。他の忠孝より拔群に越えて。思計れば第一主君小栗殿への忠義。地天晴果報の者よでかしたり〳〵。待兼ねぬ中我々は本望を遂げ追付いて。三途の川を易々と力之助諸共に。手に手を取つて渡らせん。心よく臨終せよ恨んでくれなさりととては。不便の者の有樣やと スエテ涙をこぼし云ひければ。地なかばは消えし玉の緒の苦しき中に手を合せ。地有難のお詞やなげの情の一ふしに。二世の夫婦とあるからはフシ何か命の惜しからん。地待ち參らする宮内樣力之助樣待ちますと。是を最期の詞にて終に空しくなりにける。傍に在合ふ人々もフシ哀と袖をぬらしける。宮内涙の下よりもヤレ力之助。詞一夜の枕を交すといひ母が由緣の者なれば。地さぞや不便に思ふらん名殘惜しめとありければ。力之助につこと笑ひ。地敵の顏こそゆかしけれ外に心はなきものを。拔闘

東への御立は何時に極り候と。地とつてもつかぬ挨拶に宮内喜びヲ、それよそれよ。我子ながらも忠孝の二字備りて頼もしや。最早天運時至れり片時も早く旅立たん。同意合體の人々へも。手寄々々に居宅をしまひ急いで下られ候やうにと。地廻狀を廻すべし落付く所は先達。横井勘内が居住する本能の宅にて會合せん。對陣次第は軍の體用。夜討忍びは不意の量配案内のうちは勝利の一決。茫蠢が魚荷となつて。主を助けたる功を慕ひ肩は八百屋の負子に苦しみ。頭は茶人の丸きにかへども誰かは是を蔑らんと。大岸宮内が棟梁に邪曲を入れぬ墨かねにて。えりに選つたる忠義の武士死を鴻毛の輕きにたのしみ。義を泰山の重きに置くたとへ龍門原上の。土にその身は朽つるとも譽は古今未曾有の。武士の鑑は是なるわと聞く人。感を催せり。

第五　信之部

地昨日と過ぎ今日と暮れゆく年月の。横山郡司信久は一子三郎信遠を密かに招き。詞誠に某程果報ゆゝしき者はなし。不慮に小栗と口論し一命終るべかりしに。武名未だ盡きざるにや恙なく數日と送り。あまつさへこの如く別殿をしつらひ。禁裏の役義迄をゆるされ歡樂に暮す事。老後の思出是に過ぎじ。和殿輩も有難く存じ隨分忠を勵むべし。それにつけ小栗が一族浪人して。此所彼處に徘徊し某を狙ふと聞き。かねて用心嚴しく與力の勢を催し。寢る間も油斷せざりしに此の頃聞けばこの者共。地或は落失せ病死の者渡世のために商賣し。又貯ある者色里に身をゆだね。酒宴に長じ我を忘れ。詞放埒もなき輩。もうその如くの根性からは町人には劣れり。それによつて巡見遠見の者も引かせり。いよ〳〵横山が運の強きを喜び。地人に語らず祝酒さりながら。油斷大敵の基この上にも夜ざとく寢よ。身も休まんに三郎も。今宵はゆるりと寢られよと數献に舌もなへまはり。千鳥足許ひよろ〳〵と後姿の影もなき。今宵限りの命とは　三蓋後にぞ思ひ〻知られたり。地フシすでにその夜も。更けゆけば大岸宮内親子を始め。十人の殿輩に卅七人の加勢。白裝束に黑羽織皆一樣の印紋。主人といふ字を切付け。コハリ思ひ思ひの名字を書き。鎖帷子鎖小手。鎖の鉢卷革頭巾弓槍長刀掛矢槌。かけ縄はや縄繼階子得物々々を提げ。提げ出でけるはフシ花やかなりける出立なり。地頃は極月末つかたちら〳〵と降る霙雪。夜は何時ぞ丑の刻時分もよしと横山が。門前にとりかけ内の樣子を窺ひける。詞時に宮内人々に向ひ。誠に亡君の仇を報ぜんた

め。唯今迄の憂き苦勞天運に叶ひ。各一所に思立ち今宵本望を達せん事。地弓馬の譽この時なり豫て言合せたる如く。未練の働致すまじ。女童に刃向ひ給ふなたとへ亂軍となるとも。相圖の笛を吹くならば一度にどつと寄り給へ。地かゝる時には太鼓を打たん又合詞の定めやう。味方は山。敵は川と心得給へ。誰にもせよ横山父子を討取らば。地その儘貝を吹立てよ。進みて同志討すべからずと。諜し合するその中に舘の内の火の廻り。御用心と呼ばはつて フシ己が部屋にぞ入りにける。地時刻移さずはや入れと相圖の詞浪といふ。心得たりと梶右衞門塀に階子を打掛けてオクリそろりへそろりと上りける。地番の男早くも見付けすは何者と聲かくる。所を飛下り取つて押へ フシ高手小手にいましめける。隙をあらせず表より門の扉を打碎き。一度にどつと込み入りしは三重すさまじかりける〳〵勢なり。地横山一家度を失ひ。上を下へとかへしつゝ丸裸に提灯さげ。なう悲しやと駈出づる。切物一つを二人して奪合ひ表へ逃ぐる體。これぞ誠に曾我兄弟裾野の夜討もかくやあらん。雙方互に入亂れ火花を散らして三重〳〵戰ひける。地この騷動に近所の屋敷高提灯を立並べ。小高き所に立上り。何事やらん何事ざふと咎めける。詞時に宮内つつと出で。我々は小栗の判官爺氏が家來共。御存じの如く横山殿は主君の敵。年來附狙ひやう〳〵今宵忍入り。本望を達し候侍は相互。あはれ御見遁し賴入ると答へければ。地とかくの答もあらばこそ御尤々々と。云はぬばかりにうなづいて。フシ皆々提灯引きにけり。地隙を窺ひ横山は三郎に介錯せられ。此所彼處と逃廻りやう〳〵として柴部屋に フシ親子手を取り隱れけり。地宮内を始め一味の者。敵親子を取逃し八方に手分けをし。尋ね巡れど行方なしェ、無念な腹立や。年頃心を盡したるその甲斐もなくやみ〳〵と。地討洩らしたる口惜しやと拳を握り牙を嚙み齒噛をなして居たりける。詞中にも只八詞を掛け見ぬ所こそあれ此方へと。先に進んで柴部屋炭部屋殘りなく。隙間々々を突きければ何かは知らず炭薪。雨の如くに投掛くるすは彼奴こそは敵なれ。討取れやつと云ふ儘に只八が槍先に。三郎突留め引出す續いて重藏めつた突き。手應するに猶ゑぐり思ふ儘に突留め。詞松明振上げ見てあれば横山郡司三郎なり。地やれ嬉しやと手を合せ フシ天の拜して喜びける。時詞重藏サア大岸殿はや首討たせ給へと云ふ。宮内聞いて御心底滿足せり。御自分の高名なれども指圖に任せ。某初太刀仕ると立寄り親子が首討落し目よりも高く差上げ。

南無主君尊靈日頃の無念晴らさせ給へ。南無阿彌陀佛と回向をなし。判官兼氏が家來共。主の敵横山親子を討つて退く。我と思はん者あらば出合へ

千秋萬歲樂

小栗やつと呼ばはり。力足をとう〳〵〳〵。どつとあげたる勝閧の。聲諸共に立退きけり。上古末代今の世に又あるまじき武士の手本に。是を書殘す。

石之六遂吟覧頌句音節墨譜等不違毫釐令加筭旦以著述之全夲令校合畢尤可爲正本也

豐竹若太夫

紀海音

大坂上久宝寺町三丁目正本屋西澤九左衛門版